

今年ひっじ年である。デフレと災厄に慌しく明け暮れた29年は、キレイに忘れたいものである。そして本年こそ、明るい希望を持って平和な年にするように努力しましょう。そのためには、誰もが融和協調の精神を基調としなければならない。そこにはじめて真の自由と平和の民主主義が育つことができる。

人間もあの素朴で温順な羊のようにありたいものである。あらゆる苦惱を忘れたかのように、黙々として生きている羊、陽春の光を浴びながら、広い草原を伸よくかけめぐっている元気な仔羊の群、大山羊を先頭にして何十、何百の綿羊が群をなして、規律正しく、ネリ歩いている悠々たる風景は誠にどのかである。これこそ真の生きている平和像ではないだろうか？

そもそも綿羊の起原は西紀5,000年前頃にさかのぼるといわれ、わが国においては、嵯峨天皇の弘仁11年頃(1,106年前)に初めて新羅の国から贈られて来たそうである。しかしその後、綿羊の成育にはわが国の気象、風土が適さないために、その飼養は余り普及しなかつたようである。勿論、それには試験、研究費の不足や農民の関心が薄かつたことなどもその理由の一つであると思われる。本県において綿羊が統計に初めて現れたのは明治38年でその数は13頭になつている。

しかし戦時から戦後にかけて、わが国における毛織物の需要が激増したけれども、その輸入量が相当不足したために、合成繊維工業の振興を図るとともに、綿羊の飼養増殖が大いに奨励されて来たのである。

特に戦後になり、毛織物の需要が毎年増加して、28、29年頃には国民一人当りの使用量が約1.96ポンドといわ

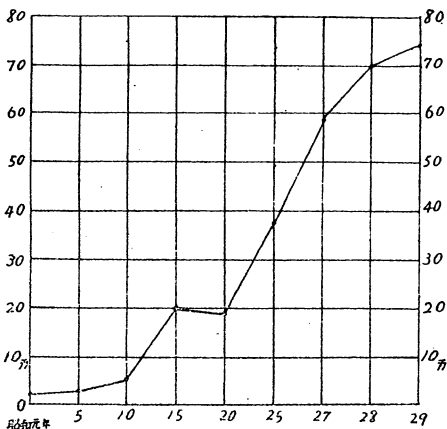
れ、昭和8年頃の最盛需要期の1.8ポンドを遥かに上廻っている。そのために、羊毛及び毛織物類の輸入量も著しく増加して、28年(1月～12月)は約2億1,721万ポンド(原羊毛1億8,954万ポンド(+)洗上羊毛781万ポンド(+)ウールトップ1,986万ポンド)に達し、その輸入代金は約760億円にのぼり、総輸入金額の約10%を占めていることは誠に等閑視できない点である。(28年大蔵省税関部調)

最近国内における綿羊品種の改良及び飼養管理方法が格段の進歩を見せ、他面農民の経済的関心も高まり、綿羊の飼養頭数は毎年増加の一途を辿っている。農林省の調査によれば、29年2月に全国の綿羊飼養農家は約48万6,000戸(昭和15年の60,000戸に比べ8倍余)、その飼養頭数は約73万頭(昭和15年の19万6,000頭に比べ約3.8倍)の多数にのぼっている。(第1図参照)なお国内における羊毛の生産は年間僅かに600万ポンドに過ぎないそうである。

又本県においても、28年8月の県調査課の調査によれば飼養農家は4,232戸(昭和15年の246戸に比べ約17倍)、飼養頭数は6,287頭(昭和15年の472頭に比べ約14倍)になつている。なお29年の分は現在調査中であるけれども7,000頭を越えているものと思われる。(第2図参照)

これらの諸点を見ただけでも、わが国における綿羊の増殖問題は今や農家経済の向上と生活改善を図るとともに、外貨節約のためにも大きな役割を担つていることになる。特に現金収入の少い日本の農家としては羊毛及び肥料の自給と相俟つて、一石三鳥の利益が挙げられるわけである。(Y. N生)

(第1図) 全国における綿羊の増加状況 (農林省統計調査による)



(第2図) 本県における綿羊の増加状況 (昭和元年～20年農林省統計調査、22年～28年総務部調査課)

